

東京消防庁警防本部指揮隊機関員(事件当時) 蒲原 睦さんの手記

消防の仕事柄なのか、昼夜の別も、その内容や規模もなく災害に備え、危険な現場へと赴き活動することは宿命的なことで、想定し得ない現場に出場することも稀にあります。自らが現職時代、それは今から25年前、平成7年(1995年)3月20日(月)の午前8時過ぎに起きた事件は、あまりにも凄惨極まりない現場で未だに脳裏から消えることはありません。その事件こそが、日本の市街地内で化学兵器が使用され、無差別に罪なき多くの人命を奪い、傷つけた同時多発テロ事件であり、化学テロ災害の怖さを、世界中の人に知らしめ、また震撼させた「地下鉄サリン事件」です。

当日は、警防本部指揮隊の担当機関員で、非番日でもう少しで交替時間となる頃、車両点検を済ませ自席で執務中のことでした。机上の受令機から出火報を受信、その場でメモをとると、まさに「地下鉄築地駅」であり、付加された情報では、「爆発火災、多数の逃げ遅れやけが人がある」というものでした。

築地駅では、到着した所轄指揮隊から「現場に火煙もなく臭気も感じないが多くの傷者がある」との応援要請と、また別に、次々と複数の地下鉄駅でも発災して、情報の交錯、混迷を極める中、警防本部指揮隊も築地駅へ出場、続々と入る情報の分析、実態把握に警防本部も修羅場と化していました。

築地駅の警防資料を準備、記録をとり「火災でもないのに複数のけが人、何が起きているのだろうか」ととても不安で緊張していました。そんな中、「おい、出場するぞ」と指揮隊長の一声、遂に第二指揮隊で出場、出場先は「築地駅」ではなく同じ路線の「八丁堀駅」でした。

本部庁舎からは、わずか数分で到着、目に飛び込んできたのは、地下鉄の出入口付近、歩道やビルの出入口など、わずか50m四方の場所に、けいれんしながら苦しむ人、座り込んで喉や目を押さえ、ふさぎ込む人、おう吐して横に倒れている人、苦しむ傷者に寄り添い「早くして～」と狼狽えながら助けを求める人々の姿は、目を背けたくなるような惨劇を極めるものでした。

また、自らも屋外で声をかけながら男女36人の傷者が確認できたのですが、無線機は輻輳して交信もできず、近くの蕎麦屋に駆け込み公衆電話から即報しました。さらに地下鉄駅構内を確認しようと階段を途中まで降りかけたところで、駅員から「全員避難しました。何かなんだかわからないから先に行かないほうがいいです」と言われて、素直に引き返したことで、結果的に難を免れました。

その後は、応援指揮隊との活動に合流、任務分担を受けて、化学機動中隊による物質特定と救出・救護活動を急務に、救急指揮所と指揮本部態勢の確立、はしご車2台で幹線道路を遮断、救護所スペースの確保、救急車両の進上路と退路の確保、毛布や防水シートの資器材集結など、無我夢中の

東京消防庁警防本部指揮隊機関員(事件当時) 蒲原 睦さんの手記

活動に追われたことを覚えています。

自らも、当時のことを思うと今でも目頭が熱くなり、胸が締め付けられるように思えることがあるのですが、テロ災害は、何者かが密かに企てたもので、現場に確かな情報などあろうはずもなく、その場で助けを求める傷病者が目に入れば、なりふり構わず咄嗟に行動してしまうのも必然的です。この災害でも、何も知らず無防備であった隊員の多くが、懸命な救助活動や救急活動に従事の末に、無色・無臭の猛毒サリンに暴露し、受傷してしまいました。これこそが密かに企て二次被害をも拡大せんとする化学テロ犯人の狙いであり、脅威なのです。

神経剤「サリン」なるもの、当時の化学機動中隊でも検出不能で、強力な殺傷力を持つ有毒化学剤を使ったテロが、まさか首都東京で起きるなど、想定外であったことの証でした。むやみに不安を煽りたくはないですが、時代が変わっても、今や世界中で起きるテロや災害等は東京でも想定外ではなく、それ相応の備えが必要なのだと思います。また、この事件を契機に、専門部隊、装備品並びに消防戦術の整備等々、活動態勢の充実、強化が図られ今日に至っているのです。

「月刊「東京消防」令和2年4月号」

(2020年4月10日、一般財団法人東京消防協会)